
川端康成全集

第十四卷

獨影自命・續落花流水

新潮社

川端康成全集第十四卷

命 自 影 獨
水 流 花 落 續



昭和四十五年十月二十五日 發行
昭和四十八年九月三十日 三刷

定價 千七百圓

著 者 川 端 康 成

發行者 佐 藤 亮 一

印刷者 多 田 基

印刷所 多田印刷株式會社

原色版 半七寫眞工業株式會社

製本所 新宿・加藤製本所

東京都新宿區矢來町七一

發行所 株式會社 新 潮 社

電話東京〇三二六〇一一一
一六二 振替東京八〇八番

亂丁本、落丁本は本社又はお買求め
の書店にてお取替へいたします。

第十四卷

目次

獨影自命……………七

——作品自解

（續落花流水）

徳田秋聲「爛」あとがき……………二六

古賀春江と私……………二七

青野さんのこと……………二九

眞珠夫人	二〇五
------	-----

横光利一文學碑	三二七
---------	-----

林芙美子さんの手紙	三三三
-----------	-----

夕日炎炎	三三三
------	-----

——「晩年の父室生犀星」の序に代へて

獻詞	三三九
----	-----

——「小説四十六年」序

人間隨筆……………三三

高見順……………四九

「伊豆の踊子」の作者……………五五

獨影自命・續落花流水

獨

影

自

命

—
作
品
自
解

一、これは、昭和二十三年から二十九年にかけ、新潮社から刊行された『川端康成全集』全十六巻の「あとがき」を集成したものである。表題の「獨影自命―作品自解」も今回つけられた。

二、一部既刊内容と重複する箇所がある（「十六歳の日記」「少年」が、極くわずかな分量であり、全體のまとまりを守るうへから）も、ここではらずに収録した。

三、―念のために―本文中「この全集……」とあるのは前記の全集を指し、今回の全集のことではない。また、年齢は数へである。

編輯部

獨影自命 内容

一ノ一は、第一章第一節で、該全集の第一巻
あとがきの一を指す。以下これにならひ、區
切・章分けは、すべて原形のままである。

心境、五十歳

同、敗戦

同、餘生

全集の装畫

全集の編輯

處女作時代

日記（大5／2／18・12／31）

日記（大5／12／31）

日記（大5／11／23・11／26・12／14）

自作について

「十六歳の日記」斷片

「油」「葬式の名人」「孤兒の感情」

二ノ四

二ノ五

二ノ六

二ノ七

三ノ一

三ノ二

三ノ三

三ノ四

三ノ五

四ノ一

四ノ二

四ノ三

四ノ四

四ノ五

四ノ六

四ノ七

「招魂祭一景」

日記（大10／3／27・4／4・6・9・5／2）

「非常」「南方の火」その他のモデル

「篝火」「非常」その他、戀愛の餘波

みち子、日記（大11／4／2・3・4・16）

日記（大11／5／1）

日記（大11／6／10・11・20・21・22・23・24・25）

日記（大12抄）

日記（大12抄）

前置、日記（大12／1／1・2・3・10・12・13・14・16・19・24・25）

日記（大12／5／30）

日記（大12／11／20）

日記（大13／3／30）

大學時代、恩師

大學時代、友人

「文科大學挿話」

五ノ一	第一・第二作品集、湯ヶ島	八ノ一	湯ヶ島での日記（大14／6／18・19・20・21）
五ノ二	『感情裝飾』		
五ノ三	吉田謙吉君、「秋より冬へ」	八ノ二	湯ヶ島、「温泉六月」「燕」「初秋旅信」
五ノ四	梶井基次郎君		
五ノ五	「湯ヶ島での思ひ出」その他	八ノ三	湯ヶ島、撞球、ゴルフ
五ノ六	梶井君の湯ヶ島からの書簡（昭2）	八ノ四	池谷信三郎君
五ノ七	日記（昭2／4／5上京記・6・7・8・9）	八ノ五	同、結婚式
五ノ八	京都、新感覺派映画協会	八ノ六	伊豆の小説
五ノ九	「春景色」	八ノ七	「温泉宿」「春景色」
		八ノ八	「伊豆の旅」
六ノ一	「雪國」（昭9―12―22）「あとがき」	八ノ九	
六ノ二	「雪國」について		
六ノ三	「伊豆の踊子」	九ノ一	「文藝時代」
六ノ四	湯ヶ島	九ノ二	同人、横光君からの手紙（大13／8／7）
六ノ五	湯ヶ島、日記（大15／3／31・4／1・2・3）	九ノ三	横光君の手紙（大14／4／30・7／23・12／11）
六ノ六	上京、「四つの机」	九ノ四	佐々木味津三君の手紙（大13／8／11）
			片岡鐵兵君の手紙（8／19）
七	「女性開眼」（昭11）「美しい旅」（昭14）	九ノ五	「文藝時代」と『文藝春秋』

九ノ六 横光君の憤激
 九ノ七 當時の文壇
 九ノ八 菊池さんの「四つの偶然」「文藝時評」
 九ノ九 新感覺派
 十 旅
 十ノ一 掌の小説
 十ノ二 五冊の小説集
 十ノ三 初期の「標本室」として
 十ノ四 「骨拾ひ」その他
 十ノ五 「日向」その他
 十ノ六 「金糸雀」「髪」その他
 十ノ七 「港」「髪」「有難う」
 十ノ八 「お信地藏」「冬近し」その他
 十ノ九 「滑り岩」「有難う」「夏の靴」その他
 十ノ十 「落日」「心中」「母」その他
 十ノ十一 「心中」「雀の媒酌」その他
 十ノ十二 「合掌」その他

「朝の爪」「死面」その他
 「故郷」その他
 「夫人の探偵」その他
 「日本人アンナ」その他
 「百合」「顔」その他
 「舞踊會の夜」その他
 制作順
 「掌篇小説の流行」
 島木健作君の月報の文章
 選集「あとがき」執筆の思ひ出(昭
 13/7)

十ノ十一
 十ノ十二
 十ノ十三
 十ノ十四
 十ノ十五
 十ノ十六
 十ノ十七
 十ノ十八
 十ノ十九
 十ノ二十
 十ノ二十一
 十ノ二十二
 十ノ二十三
 十ノ二十四
 十ノ二十五
 十ノ二十六
 十ノ二十七
 十ノ二十八
 十ノ二十九
 十ノ三十
 十ノ三十一
 十ノ三十二
 十ノ三十三
 十ノ三十四
 十ノ三十五
 十ノ三十六
 十ノ三十七
 十ノ三十八
 十ノ三十九
 十ノ四十
 十ノ四十一
 十ノ四十二
 十ノ四十三
 十ノ四十四
 十ノ四十五
 十ノ四十六
 十ノ四十七
 十ノ四十八
 十ノ四十九
 十ノ五十

高圓寺、大宅壯一君
 同、高利貸
 「海の火祭」(昭2)
 高圓寺の家
 熱海の家、梶井君の手紙(昭3/3/
 20)
 梶井君の手紙(昭3/1/2・2/2・
 2/15・3/17・26)

五ノ七

五ノ八

十一 谷義三郎君の手紙(昭3/2/4)

上野櫻木町(昭4/9)日記(4/9/17)

五ノ八

作家の日記(昭3/3/3)

五ノ九

同右

五ノ九

大森ホテル

五ノ十

同右、「町會議員の釋明」

五ノ一

「再婚者」(昭23/27)

五ノ一

「千羽鶴」(昭24/26)「山の音」(24/27)

五ノ二

同右

五ノ二

同右

五ノ三

「舞姫」(昭25/26)

五ノ三

「千羽鶴」

五ノ四

同右、假名づかひ

五ノ四

同右、藝術院賞

五ノ五

同右、映畫「花のワルツ」(昭11)

五ノ五

同右、未完

五ノ六

「化粧と口笛」(昭7)

五ノ六

同右、脚色、久保田万太郎氏、「源氏」

五ノ七

「化粧と口笛」(昭7)

五ノ七

同右

五ノ一

「名人」(昭26/27)

五ノ八

福引き、心境

五ノ二

同右

五ノ八

同右

五ノ三

同右、雜誌發表

五ノ一

年譜

五ノ四

同右

五ノ二

感想隨筆、「末期の眼」「禽獸」

五ノ五

同右

五ノ三

ラディゲの生涯

五ノ六

「少年」(昭23/24)

五ノ四

完結の言葉

五ノ七

「たまゆら」

五十歳を記念する祝意も含めて全集の刊行とは言つても、ひとへに新潮社の恩誘によることで、私は五十といふ年に深い關心も強い實感も持つてはゐない。

自分の年齢といふものを、人はどれほど知つてゐなければならぬのか、どのやうに考へてみなければならぬのか。つまり年齢の問題には心しみ凍ることなく私は今日に至つたやうである。折節自分のこの年齢感の迂濶さに思ひあたつて、自分になにか不安と危怖とをいただくことはあつても、鳥影か雲影のやうに痕はとどめなかつたやうである。五十歳から後はどうであらうか。

しかし、日本の敗亡が私の五十歳を蔽ふとすれば、五十歳は私の生涯の涯であつた。片岡君、横光君、また菊池さんの死去が私の五十歳のこととすれば、五十歳は私の生涯の谷であつた。生き延びて全集を出す幸ひはみづからかへりみて驚くべきなのであらうか。

まことにまた五十歳の私には、生きてゐるとかういふ時も來るのかと、新に泉を汲む思ひもあつて、再生の第一年に踏み出したのかもしれない。としても、五十歳までの作品を明らかに過去と一線を引く確信はまだ私になく、處女作以來私は變移の少い作家であるにしても、一應全作品をまとめるのも時宜であらうか。

私は横光君の生前に書をもらったことがないので、死後夫人に無心をした。その一つは横光君が若い時から好んで書いた、「蟻臺上に餓えて月高し」であつたが、もう一つ文机の略畫が添へてあるのに惹かれて選んだ漢詩には、「寒燈下硯枯」の句があり、「獨影寂欲雪」の句があつた。なぜかうさびしいのを取つたか、自分の家に歸つてから見てさびしくなつた。

横光君はどういふ心づから「寒燈下硯枯」と書いたか。敗戦は私にもいささかそれに通じる凄寥を深めさせた。私は自分を死んだものとしたやうであつた。自分の骨が日本のふるさとの時雨に濡れ、日本のふるさとの落葉に埋もれるのを感じながら、古人のあはれに息づいたやうであつた。

その心沈みを生涯の涯と言ふのはをかしいが、私は敗戦を涯としてそこから足は現實を離れ天空に遊行するはかはなかつたやうである。元來が現實と深く觸れぬらしい私は現實と離れやすいのかも知れない。世を捨て山里に隠れる思ひに過ぎないであらう。

しかし現世的な生涯がほとんど去つたとし、世相的な興味がほとんど薄れたとしたところから、私にも自覺と願望とは固まつたやうである。日本風な作家であるといふ自覺、日本の美の傳統を繼がうといふ願望、私には新たなことではないが、そのほかににもなくなるまでには、國破れた山河も見なければならなかつたのであらうか。

私は戦争からあまり影響も被害も受けなかつた方の日本人である。私の作物は戦前戦時戦後にいちじるしい變動はないし、目立つ斷層もない。作家生活にも私生活にも戦争による不自由はさほど感じ